

聖書：ピリピ 2：16b～30

説教題：パウロ、テモテ、エパフロデト

日時：2017年2月12日（朝拝）

いつもは2～3節ずつ読み進んで来ましたが、今日は一気に15節も取り上げることにいたしました。もちろんここを何回かに分けることも可能です。ここには3人の働き人のことが記されています。説教題の通り、パウロ、テモテ、エパフロデトの3人です。その一人一人に注目して3回に分けて説教することも可能ですし、もっと細かく見ることも可能だと思います。しかしこの3人は別々のテーマの下でその名前が出て来ると言うより、むしろ一つの流れの中で連続して出て来ます。そのことを心に留めるためにも、いつもに比べれば異例ですが、1回で見たいと思っています。

まず最初はパウロです。ここまで2章ではピリピ人たちへの勧めが語られて来ました。2章最初の部分では、お互いに一致すべきことが勧められました。へりくだって互いに人を自分よりもすぐれた者と思うべきこと、そして究極の模範としてキリストの姿が示されました。その上でパウロは12節で「恐れおののいて自分の救いの達成に努めよ！」と語りました。すなわち救いの最終ゴールを目指して前進せよ！と。その具体的な道として14節で「すべてのことを、つぶやかず、疑わずに、行ないなさい」と語りました。そうして神の子どもらしい特性を発揮し、世の光として輝くように！と勧められました。

そして今日の16節後半へとつながっています。パウロはここで「そうすれば、私の努力や苦労はムダにならない」と言っています。この短い言葉にもパウロの犠牲的な奉仕の姿が示されています。一つ目の「努力」という言葉は「走る」という意味の言葉です。パウロはマラソンランナーのように、常に一点を見つめ、全力投球でひたすら前進して来ました。もう一つの「苦労」という言葉は、つらくて骨の折れる激しい労働を指す言葉です。パウロは力を振り絞って働き、多くの労苦を味わって来ました。しかしだから私はキリストの日に胸を張れると言っているわけではありません。16節の「誇る」という言葉は、「自慢する」という意味ではなく「大いに喜ぶ」という意味です。そしてそれは主にある喜びです。キリストの日とは1章6節で見ましたように、神の救いのみわざが完成する日です。ただ恵みによって救いのみわざに着手された神が、ついにその完成へと至らせてくださる日です。ですから何よりも賛美されるべきは神の恵みです。しかしその日のために一生懸命ささげた自分の奉仕が無駄に終わらなかったこと

を知って、私は大いに喜ぶということをパウロは言っているのです。

衝撃的なのは次の 17 節の言葉でしょう。彼はそこで「たとい私が、注ぎの供え物となっても」と言います。これは殉教の死の可能性について述べたものです。パウロはただ自分が「注ぎの供え物となる」ことについて語っているのではなく、「あなたがたの信仰の供え物と礼拝とともに」と言っています。ですからまず彼が考えているのはピリピ人たちの信仰の供え物です。これは何でしょうか。ローマ書 12 章 1 節に「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」とありますように、これはピリピ人たちの礼拝生活全体のことでしょう。その彼らの礼拝生活が神にささげられるために、自分自身のいのちを使い果たす結果になっても私は喜ぶとパウロは言っているのです。

私たちはこのようなパウロの言葉を聞いて驚きを覚えます。ピリピ人の祝福のためには、自分のいのちが取られても良いとまで語るパウロ。とてもそのような境地に自分は達することはできないと思います。しかしパウロはすでに 1 章 22～25 節でこう言っていました。自分一人のことを考えるなら、世を去ってキリストとともにいる方がはるかに良い。そちらの方が断然好ましい。しかしピリピ人の信仰の進歩と喜びのためには、なお地上に生き永らえる方が良い。そういう彼からすれば、確かにピリピ人の祝福のために自分をささげる生涯を全うできるなら、こんな嬉しいことはないということになるのでしょうか。キリストにあってもはや生と死の問題を乗り越えているパウロです。そして地上の生を、その目標目指して一心にささげて歩んでいるパウロです。そのことを喜んでいるパウロです。その私の喜びと一緒に喜んでください、とまでパウロは 18 節で語っています。

次に見るのはテモテです。19～24 節までの部分です。パウロはここでテモテを先に遣わす予定であると述べます。テモテはご存知の通り、パウロの愛弟子です。使徒の働き 16 章、第 2 次伝道旅行でルステラを訪問した時から、テモテはパウロのお伴をするようになりました。そしてその後まもなく、ヨーロッパに渡って最初のピリピ伝道が行なわれましたから、テモテもピリピ教会の設立に深く関わったのでしょう。それゆえこのピリピ人への手紙の共同執筆者として 1 章 1 節に彼の名も書き留められています。パウロがこのテモテを遣わそうと思っているのはなぜでしょうか。19 節に「あなたがたのことを知って励ましを受けたいので」とあります。パウロはローマの獄中にありながら、ピ

リピ教会のことを案じていました。その後のニュースを聞いて励ましを受けたいと願っていました。彼らのことを深く心にかけているパウロの姿がここに 있습니다。そしてもちろん自分が励ましを受けたいというだけでなく、テモテを通してピリピ人たちを励ましたいという目的もそこにあつたでしょう。ピリピ人たちはパウロの様子を案じていました。その彼らに近況を伝え、また福音を語って彼らを励ましたい。しかし今すぐではないことも 23 節に記されています。「私のことがどうなるかわかりしだい」と言っています。おそらくパウロはもう間もなく、自分の裁判に関する何らかの動きがありそうだと見ていたのでしょう。それまではテモテを自分のそばに置いておきたい。彼に大切な働きを担ってもらいたい。しかし成り行きが分かり次第、彼を遣わすと言っています。そして 24 節を見ると、その後で自分自身も、釈放された暁にはあなたがたのところに行きたいと述べています。

このテモテについてパウロは何と語っているのでしょうか。20 節に、テモテは「私と同じ心になっている」とあります。そして彼以外にはそういう人はいない。これはどういう意味でしょうか。続く 21 節にこうあります。「だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。」ある意味で残念なことです。これはローマにいた普通のクリスチャンたちのことです。もちろん彼らはキリストを信じていました。キリストのために何の奉仕もしていないというわけではなかったでしょう。しかし自分の利益を優先して追求する思いに支配されていて、他の兄弟姉妹のために、あるいはキリスト教会全体のために、自らをささげることにおいてあまりにも不熱心、あまりにも淡白であった。もちろん彼らは、自分の得にならないことは一切やらないという原則を常に掲げていたわけではないでしょう。しかし彼らの深いところでは結局、自分の得になることならするが、そうでなければあまり関わらないという姿が一般に見られた。4 節で「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい」と言われましたが、その反対に自分自身のことばかり求めているという姿があつた。そんな中、テモテは自分のこと以上にキリストのことを求めていた。そしてそのような者としてピリピ人たちのことを真実に心にかけて、心配していたのです。

パウロの言葉で注目に値するのは 22 節です。そこに「子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕してきました。」とあります。テモテはパウロの霊的な子であり、パウロはその父にあたります。だからと言って子であるテモテは父パウロに奉仕して来たとは言われていません。そうではなく「いっしょに福音に奉仕してきた。」

つまりパウロも仕える立場にいたのです。パウロも福音のために働くしもべ、奴隷の立場にありました。テモテはそのパウロといっしょに福音に奉仕して来た。まさにパウロと一つ心で、福音に奉仕するテモテです。その彼がピリピに赴いてくれたらどんなに大きな働きをしてくれることでしょうか。すでにピリピ人たちはテモテが有能な働き人であることを知っています。22 節の「りっぱな働きぶり」という言葉には印がついていて、欄外 22 に「適格性」とあります。これは何度も試されて合格したという意味です。その彼が来てくれるのです。それは彼らにとって何という嬉しい知らせでしょうか。

最後 3 人目は 25 節以降に記されているエパフロデトです。彼の名前は聖書ではこのピリピ書にしか出て来ません。2 章後半と 4 章 18 節に出て来ます。4 章 18 節を見ると、エパフロデトはピリピ教会からパウロのもとに遣わされたピリピ教会のメンバーであったことが分かります。彼はピリピ教会代表の使者としてパウロに贈り物を届け、パウロを助ける働きを委ねられました。ところが彼は病気になってしまいました。27 節に「死ぬほどの病気」とあります。来る途中にそうなったのか、あるいはローマに来て奉仕する間にそうなったのは分かりません。しかし神のあわれみによってこの時まで病状は回復したようです。

パウロはこの彼をまずピリピ教会に送ろうとします。本来、自分のもとで仕えるために遣わされて来た人です。しかし彼の病気のことがピリピ教会に伝わっていました。当然ピリピ人たちは心配していたでしょう。またそのことをエパフロデト自身も気にしていました。そこで有用な働き人ですが、パウロは彼をピリピ教会に送ることにしたのです。そしてこのエパフロデトに、このピリピ人への手紙を持たせて運んで行ってもらったと考えられます。

その彼についてパウロは何と言っているのでしょうか。まず 25 節でパウロは「私の兄弟、同労者、戦友」と数々の言葉を重ねています。主にある「兄弟」「同労者」までは、まだ一般的であっても、さらに「戦友」とまで表現されています。ここから分かることは、エパフロデトの働きは決して鼻歌を歌いながらのんびりやれるようなものではなかったということです。イメージは戦争における兵士です。数々の危険の中でまさに体を張って戦う日々を彼は過ごしていた。

そして何と言ってもエパフロデトについて言われていることで目に留まることは、死

ぬばかりにまでなったということでしょう。27節を見るだけでは、病気にかかったことは分かりますが、それ以上のことは分かりません。しかし30節から分かることは彼はキリストの仕事のために命の危険を冒して死ぬばかりになったということです。そして同じ30節後半から分かることは、エパフロデトはピリピ教会全員の代わりになるほどに仕えようとしたということです。全員分の思いを現わすほどに奉仕するのは大変なことですが、エパフロデトはそのように奉仕したのです。そのあまり死ぬばかりになった。

もちろん奉仕のあまり、病気になることが勧められているわけではありません。こうならないように、もっとうまく奉仕する方法があったかもしれません。しかしそれは第三者的な冷めた目から見た「結果論」にしか過ぎないでしょう。エパフロデトにとって自分の健康状態が守られる範囲内でのみキリストに奉仕しようというような考えはありませんでした。まず「自分の生活の安全」が先にあり、その後に「キリスト」が来たのではない。むしろその逆だったからこそ、彼の優先順位の2番目、3番目のことが犠牲を受ける結果となった。ですからそこにはエパフロデトが何を一番大切にしていたのか、何に心と体をささげていたのかが鮮やかに示されることとなったのです。この「いのちの危険を冒して死ぬばかりに」という表現は、明らかに主イエス様の姿を彷彿とさせるものとしてパウロは書いたのでしょう。それゆえ、この彼を喜んで迎え入れなさい、また彼のような人には尊敬を払いなさい！とパウロは言います。

以上、私たちは今日の箇所パウロ、テモテ、エパフロデトという3人の姿を見て来ました。そしてこの章を読み終えて思うのは、これら3人はみな、この章前半に記されたキリストの姿を映し出しているということではないでしょうか。一人目のパウロはピリピ人たちのために注ぎの供え物になっても喜ぶと言いました。二人目のテモテはみな自分自身のことばかりを求めらる中で、他の人のことを真実に心配するというキリストの姿を反映していました。そして3人目のエパフロデトはいのちを犠牲にするほどに仕えました。果たしてパウロはこういう意図を持ってこの章後半を書いたかどうかは議論のあるところだと思います。しかし彼がそのことを意図していなかったとすれば、むしろ期せずしてこの3人にキリストとの非常な類似関係が見られることの内に、いかに彼らが普段から主に導かれる歩みをささげていたか、主の足跡にならう歩みをしてきたかという強烈な証がなされていると言うべきではないでしょうか。

ピリピ人たちは2章4節で「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい」と

勧められましたが、実際にそのように生きていた人たちが彼らの目の前にはいました。キリストのレプリカなる人々がそこにいました。その人々のキリストを映し出す愛の働きにより、こうして守られ、祝福の内にありました。彼らはそのことを感謝して、自分がそのように顧みてもらえばかりでなく、自らもまた他者を顧みる歩みに進むことによって、キリストの御国のために歩むようにと導かれるべきだったのではないのでしょうか。

そしてこのことは私たちにも当てはまるでしょう。今日、私たちはパウロ、テモテ、エパフロデトに注目して来ましたが、私たちの教会にもまたこのパウロ、テモテ、エパフロデトにあたる人々がいてくださったのではないのでしょうか。あるいは今もいるのではないのでしょうか。その兄弟姉妹の存在と働きを通して今日このように支えられ、主の祝福の内に生かされている私たちの群れなのではないのでしょうか。当時のローマのクリスチャンばかりでなく、今日もともすると、みな自分自身のことを求めるだけで、キリストのことを求めていないという姿があるかもしれません。そんな中、キリストの姿に導かれて他の人のことも顧みる人、キリストに導かれてへりくだって自らをささげる幾多の兄弟姉妹の働きによって支えられ、多くの恩恵を受け、今日このようにある私たちです。そのことを思って私たちは今朝、キリストと、またキリストにならって仕えてくれた諸先輩方、また今も仕えていてくれる兄弟姉妹に感謝したいと思います。そして私たちもその良きモデルにならって、私たちの主キリストを反映する歩みへ進むことができますように。願わくは私たちもまたパウロ、テモテ、エパフロデトのような、その後に従う人のモデルとなることができますように。神は私たちに志を与えて、事を行わせてくださるお方です。その神に信頼し、キリストを見つめて、いよいよキリストを映し出す者とさせていただき、今日見た3人の器のように、私たちもキリストの御国を広げる一兵卒としての歩みを御前にささげる者でありたいと思います。